
チートな魔術師

間入糺管

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートな魔術師

【Nコード】

N8641V

【作者名】

間入糀管

【あらすじ】

主人公は今年で大学一年生。親友と大学から帰り途中でいつも通り別れる。

しかし、別れたそのあと、誰かにナイフで刺され死んでしまう。すると神ないな……神を名乗る人物が現れ（自分で言ってて恥ずかしくないのか？おい、厨二）うつせえな！外野は黙つとけ！！まあ、結局最終的にとある魔術の禁書目録の世界に転生するセイバーちゃん（セイバーじゃねえ！テメエがセイバーにしたんだろ！！）ちよつとセイバーちゃん（ギロツ） 殺気立っている。ではさようなら！

この作品にはオリ主、オリキャラがいます。また原作ブレイクな
ども含まれますので嫌いには見ないことをおすすめします。

プロローグ

「お前、それ面白いの？」

そう聞いてきたのは、俺の幼稚園から今の大学1年までずっと同じ学校、同じクラスの同じ男なのに何か赤い糸みたいなので繋がれているんじゃないか、と思うほど一緒にいた、俺の幼馴染であり、大親友である、志花しばな 瑛珠えいじゆだ。

「おい、聞いてんのかよ、星刃。」

「ああ、聞いてる聞いている。」

林央いむなか 星刃せいば、それが俺の名前だ。

それで瑛珠が何を聞いてくるか、だけど。俺の今読んでる本の事だ。名前とはある魔術の禁書目録インテックス。

「ああ、結構面白いよ。」

「へえ。どういう物語なんだ？」

「ああ、それは、科学が発達した学園都市って所を舞台にするんだよ。その学園都市には人為的に何かの能力を使える学生がレベルが5まで分けられてる。そこで主人公は全く能力が使えないんだけど、幻想殺し、イマジンプレイカーっていう、異能、つまり能力なんかをかき消す力を持っていてだな」

そして俺は、友人の瑛珠に説明をする。瑛珠はそれで今度買おっかなー、なんて言ってるが、今度は俺が聞く番だ。

「で、お前が持っている本は何なんだ？」

「ああ、これは伝説の勇者の伝説って言うんだ。舞台はローランドって帝国！その中にある王立特殊学園にいるライナ・リユートが特殊な『瞳』を持っていてだな」

いつも同じようにこうして本を教え合ったりオタク文化としてネタをし合ったり。いつもと変わらない日常だった。

「じゃあな、星刃。」

「おう、また明日な、瑛珠。」

俺達の家は方角が反対方向なのでいつも通り、交差点で俺は右に、瑛珠が左に曲がって家に帰る。

「ふいー、家に帰ったらFateのHFルートをクリアするかね」。

この時俺は本を読みながら帰っていた。だからかもしれないし、家までのルートに曲がり角があったからかもしれない。俺の曲がり角を曲がるうとした瞬間、黒い服を着た誰かにぶつかった。

「あ、すみません。」

多分、俺はこの時、人生を間違えた。きっと本から目を離さなかった俺がいけなかったんだ。

俺はこの瞬間左胸に燃えるような熱さを感じた。意識が薄れていく

中、俺が見たのは真っ赤な紅と、銀色に光る鋭い何かだった。

目が覚める。俺は、寝ていたのか？いや、それは絶対違う。俺は死んだんだ。最後に見た銀色に光るやつは多分ナイフか何かだ。でも、死んだあとつてなにも残らず輪廻転生じゃないのか？まあ一応説だから、分からないが。天国や地獄というのはあっても地獄だけだと思っし……。じゃあ、ここはどこだ？

状況確認を試みよう。右見る、左見る、良い子の皆はもう一度右を見ようね！……。なんか居る。

「……見なかつた事にしよう。そして最後に
ハイ上を見よう!!」「切り替え早っ!」

真っ白な天井。これを見たらオタクとして言わなきゃいかんでしょ!

「テンプレ(?)乙」

「いや、そこは、知らない天井だ・・・、だろ普通!!!」

「誰だよ?てかいたのかよ。」

「いたよ?最初君が状況確認した時君の右側にいたよね!!君絶対
あの時無視したよね!!!?」

「うっさいなあ、寝れないじゃないか。もう、寝たいんだよ。なんか
めっちゃ眠たいんだよ。。。。。」

「ああ、それで寝ちゃうと、永遠に眠りについちゃうから。」

「うっそおおおおおん?」(;)」

「マジです。」

「はあ、マジかよ。。。。んっちよつと待てよ?コイツ
なんでそんな事分かつたんだ?
はっ!まさか!!」

「そうです。僕は神で「あるあ ないな。」ひでえ。。。。。」

「絶対ないな。コイツが神とか、ほんとないな。(大事なことなので
二回言いました。)だってコイツからめっちゃ影薄いオーラが来て
るんだもん。」

「そんなこと言ってたら転生させてあげません。」

「えっ、転生？」

「そうです。本当は他の人があの時死ぬはずだったんですが、私のミスであなただけが死んでしまったので、ばれたら私の地位が危険ですし、転生をしようと思っただけなんです。」「良いこと聞いちゃったぜ！」「はっ！！つい、口から家庭の事情がーっ」

「ふっふっふ……。今の話では、ばれたら地位が危ないんだろ？それについてだが」

俺は不気味に笑う。そして！速効魔法発動！！プライド？なにそれおいしいの？、と等価交換？ふっちょロイぜ、を掛け合わせる事によってできる最強コンボ技！

「土下座と転生で言わないでやろっ。」

ズサーーッ

それは見事に綺麗な土下座だった。

「それで転生についてですが。」

「アンタも切り替え早いな！！」

いくらなんでも切り替え早すぎだろ！というかそんなに自分の地位が危ないんかい！！

「能力は二つまででお願いします。」

「二つ、か……。それじゃあ

」

「分かりました。その二つと一つの技ですね。それと転生する世界ですが、あなたが死ぬ前読んでいたとある魔術の禁書目録におきましよう。そうですね行くのは並行世界ですから、あなたはインデックスの立場にしておきます。」

うおっ来た。これなら原作覚えてるし。一巻と二巻は忘れたけど・・・。

「ではさようなら。」

その言葉とともに俺の足元に穴ができる。もちろん重力には逆らえないわけで。

「何もここまでテンプレじゃなくなっちゃっていいじゃないかああああああああああ・・・」

下に落ちてゆくのと同時に俺の意識は薄れていった。

プロローグ2（前書き）

いやあ、二次創作ってアクセス数がすごいですね。前回と同じくらいの長さでお送りいたします。それではプロローグ2です。

プロローグ2

どうも、こんにちわ林中星刃だと思う。だと思いたい。だと思わせ
てくださいー！
まあ、ちよつとアレなことになってます。いや、ね。アレなこと
なってるだよ。

〜回想〜

「ん、意識が戻った・・・って、まだ落ちてるウウウー！！！！！」
俺は目が覚めたら暗闇を落ちていたアアアア！！ちよつ、これ死ぬ
って！っていうかいつまで落ちてんのこれ！？あ、光が見えてきた。
って痛痛痛痛痛痛てええええええええええええ！足掴まれてる！めつち
や引つ張られてるウー！！どうなってんだよオー！！

あッ、某一方通行さんの口調になッてやがるウウ!!
?声が出ない?

「うぎゃああああああああああああ!!!!!(いってええええええええええええ!!!!)」

いってえええええ!!てか今の声何!?

「うぎゃああああ、うぎゃああああああああ!!」

なぜ赤ちゃん声!?

「王よ、元気な女の子だ。」

「ああ、そうだな、マーリンよ。うむ……この子の名前は・
・アルトリア、アルトリア・ペンドラゴンだ。」

ええええええ!!俺赤ちゃんん!!しかも女の子ってふざけんなあの神ぶつ殺してやる!!えっ?ちよつと待て、その男の人なんて言った?この子の名前はアルトリア?ペン、ドラゴン?えと、俺の名前?そんなわけないよね〜アハハ。

「では、約束通り」

「よかるう。そう言った約束だったからな。」

え?マジかよ?確かにセイバーの能力を所望したよ?でもさ、これは酷いんじゃない?

親(?)がいきなり顔を近づけてくる。

あまりにいきなりだったので、思わず俺は号泣してしまった。

「びええええええ!!」

「ぬおっ!?!」

ん?号泣!?!ちよっ、待てなぜ号泣!?!

ふう〜なんか眠くなってきた、寝るか

回想終わり。まあこんだけなんだが

空の雲はちぎれたことに気付かず！（確かこんなはず）

消えた炎は消えた瞬間を炎自身さえも認識せず！（合ってるよね？）

結果だけだ！この世には結果だけが残る！

「きんぐ、くりむじょん！」

「どうかしたの？」

おっと思わずかんでしまった。

というわけで4歳になりました。最初の方は意味が分からなくて泣いてはつかで…泣いてる事に気づいてまた泣いて…もう何が何だか分からなくなってたんだよな。

あれは俺の黒歴史である！

「アルトリア？」

「なんでふか、おかあさん」

「ふ…ふは…っははは！」

「おねえちゃん！おかあさんがへんになった！」

「……はあ………つたく母上？」

「はははは………つは？あらごめんなさい」

4歳だからね？精神年齢とか生きた年数的には20を超えてるけどさ……

まっ、舌足らずな口調だけど喋るんだしいつか、という感じだな。それにしても精神は体に引っ張られるもんだな。精神は大人で男なのに何故か子供口調になってる。

「母上、今日は宴会らしいって言ってたけど………どうするの？」

「そうねえ……アルトリアを寝かしてから行くかうかしら」

「大丈夫？私がアルトリア寝させておこうか？」

「本当？ならお願いするわね？」

「任せておいて！」

「ほえ………？」

なんだか知らないうちに宴会とかに母さんが行くことになってるんだが……

ふわあ………眠たくなってきた……

「って、アルトリアもう寝そうじゃない」

「アルトリア？ベッドに入って寝ましようね？」

「はい」

ズット、ズット………

トテトトテと歩いてく。

ベッド発見！

「ぎゃふっ」

「うええっ!!」

「大変かしら?」

「大変だよ!頭をベッドの角にぶつけたんだよ!？」

「……………」

「チーン」

「あああっ、魂出てるからあ!」

「さて、宴会行こうかしら」

「こっちにバカがいる!」

「むにゃむにゃ…おねえちゃん、むねについたしぼつのかたまりぜんぶ食べきれないよー」

「こっちにもバカがいた!」

うーん……………ggd…ggdN……………

「…まだよるでふね」

早く眠り始めたせいか早くに目が覚めてしまった。
外は真つ暗だった。おそらく深夜0時とかそんな感じの時間帯だろ
う。

「といれ…」

ベッドから転がるようにして降りると、ドアを開けてトイレの方へ
向かっていく。

ふと、反対側を見ると明かりがついていた。

「あかり？リビングの方からでふね…」

明かりがついてるほうにはリビングしかなかった。

でも、こんな時間に一体誰が…？

不安に駆られながらもリビングへのドアをちよびっと開けて中の様子を見てみる。

そこには暗い顔をしていた父さんと母さん、俯いている姉さんがいた。

ドアは少しの隙間しか開いていないせいか、様子をしっかりと見ることができなかったがどうやら何かを話し合っているようだった。

「今日、イギリス清教の者がアルトリアを魔術師として出せ、と言ってきた。」

「……」

「そんな！アルトリアはまだ子供なのに…！」

「ああ、だから私も駄目だと言った。だが、ある魔術を教えるのでこのくらいの年齢ではないといけない、そう上がおっしゃっているらしい。」

「……」

母さんは血がにじみ出るくらい手を握りしめていた。
イギリス清教？上の指示？ある魔術？なんだそれ？

『君は禁書目録の立場でいいね？』

もしかすると、もしかしなくても、あれは俺が完全記憶能力を持つ者として、10万3000冊もの魔術書の原典を覚えさせることだとしたら？一年周期で、記憶を消される事だとしたら？

思わず俺は、音なんか気にせず廊下を走っていた。

プロローグ2（後書き）

というわけでした。

アルトリアはまんまセイバーの子供版です。

ほんとにまんまですね。

インデックスとセイバーってなんか似てませんか？年齢的なものとか、腹ペコなことか

貧ny（何者かに妨害されました）

プログラムの終わり(前書き)

ふじやっとプログラムが終わるぜ。

疲れたのでさっさとプログラム〜

ブローグの終わり

「今日の朝ご飯はフレンチトーストですよ？」

「わーい！」

「おっ、おいしそ〜」

廊下を走りだしたあの日から一週間が経った。

え？廊下を走りだしたあの日はその使い方じゃおかしい？どこもおかしくないのだよ？

「それじゃ食べようねアルトリア？」

「うん！」

「早く早く！」

「「「いただきます！」「」「」

「もぐもぐ…：うん、おいしいー！やっぱり母上は料理が凄いなー！」

「む、料理だけじゃないわよ？」

「あはははー！」

多分、皆あの会話を俺が聞いていたことくらい分かっている。

なんたつて音を出して廊下をはしってしまったのだ。
それでも、皆は何事も無かったかのように振る舞い、接してくれる。
俺は、それを嬉しく思うと同時に、どこかさびしく感じていた。

「アルトリア？おなかいっぱい食べてね？」

「はい」

いつか本当にイギリス清教に行った時、その時俺はちゃんと別れを
言えるのだろうか？

逃げだしたりたりはしないのだろうか？

正直不安で怖い。

いかんいかん！

転生してから暗いことばっか考えてる！

今は俯かずに前を見て歩いていく！そんなもって、目の前のことが
ら片付けないと！

先なんて、後の事なんて考えるな、だ！イギリス清教に行くまでの
間に精一杯やってやるうじやないの！

俺は6歳になった。

あの時の会話を聞いていたからかもしれないが、10日後にイギリス清教の者が迎えに来ることを

父さんと母さんに打ち明けられた。

ポジティブに考えてきたが、やっぱり怖い。魔術本の原典は原作でかなりの反動があるものって書かれていた気がする。

10万3000冊もの原典を本当に覚えさせられるかは分からない。でも、完全記憶能力を持っている俺の場合、ぐんと可能性は上がるだろう。

そう、俺は何故か完全記憶能力を持っていた。

多分神様がサービスとしてくれたんだろう。

後5日後に迎えが来る予定だ。

家では今大急ぎでイギリス清教に行くための準備をしてる。

別に婿に行くわけじゃないんだから……あつ今の俺は女だから嫁か？
どっちでもいいか……

それはともかく、後5日だ

後2日後に迎えが来る。

もう準備も終わり、後は待つだけである。

今更ながらすっごい怖くなってきた。

でも、もうすぐなんだよなあ

心の準備、できるかなあ

明日、迎えが来る。

俺は、皆と離れることになる。

小学校なんかはイギリス清教が行かせてくれるらしい。
もう、俺は決めた。くじけたりなんかしない。

絶対に、泣かない

今日、迎えが来る。

皆が皆、暗い表情をしている。

何してんのさ？もつと笑おうよ？ほら母さん、いつものバカっぷりでほのぼのにしてよ。

もう、イギリス清教に行ったら家にはほとんど帰れないんだろうなあ。

それこそ原典頭の中に入れたら、二度と帰れなくなるんだよな……

ピンポーン

音が鳴った。

父さんが応答に向かう。

「はい…もしもし、はい、はい、はい、イギリス清教の方ですか。はい、分かりました。はい、はい……」

イギリス清教の名前が出た瞬間、皆の方がビクツと揺れる。駄目だ、シリアスなんて合っていないぞ、この家族には。

この家族にはあつて、ないっ！

ガチャリという音でドアが開く。中から出てきたのは、青い髪の少年だった。

「こんにちは、私の名前はクリフォン・エルブラッドだ。以後、お見知りおきを」

「それでアルトリアですが…」

「うん、君アルトリアだね？」

俺の方を見て微笑む。

「はい」

「それじゃ、一緒に行こうか」

「いえ、少し待ってください。」

俺はズボンのポケットに手を突っ込むと、中から一枚の手紙を出した。

「母上、父上、姉上、これを。」

そしてその手紙を玄関のすぐ近くにあるタンスの上に置いた。

「もういいかい？」

「はい、大丈夫です。」

そして俺は、手をとられ、イギリス清教への道を歩き出した。

タンスの上に置いてきたあの手紙、あれには俺が転生者だということとが書かれている。

せめてもの救いに、と置いてきたのだが逆に怒るだろうか？

きつと、転生者だということを知ればきつとすぐに俺の事なんて忘れたがるはずだ。

そのために、置いてきたのだから。

「君達の一族、カストウス家は魔術の名門だね。常に50年に一人いるかいないかというほどの才能を持った魔術師を多く出すことから、かなり有名な一族の宗家、または分家ではないかと言われている。」

「そう…ですか。」

カストウスねえ。案外ペンドラゴン家の分家的な感じだったりするのだろうか？

ん？ていつか魔術師マーリンってどうなの？神話にいらっしゃる？
神話にいなかったら今ももしや生きてんのか？
んなまさか。

「さてここがイギリス清教だ。君の所属先はあちら、『必要悪の教会』ネセサリウスだ。」

さて、先は長そうだなあ……

ブログの終わり（後書き）

私は！今！ヤバい事に気がついた！

家族の名前出てきてねえ！

まあ、だからって修正しなけどね。

一応家名は出しといた

そんじゃ、さいなら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8641v/>

チートな魔術師

2012年1月4日10時49分発行